六花

9

2023

りっかはいくかい

われの指

山田　六甲

奥山の水を馳走に洗鯉
水を撒く破れホースを手で塞ぎ

政子

和歌山の完熟桃と到来す
蓮の葉に吾入り玉の転びけり
夜の蝉秋の気配のちちと鳴く
蟷螂を月にかざせば祈る形（なり）
朝蝉やそうらん節を子が復習ひ
朝まだき屋根の向うに蝉の森

お隣の前を掃きゐる秋めきて
首すぢを刺しにすぐ来て名残蚊は
欠号があると図書館よりの蝉
立秋の暑くて鯖の生き腐り
地蔵盆地蔵の化粧直しかな
禅僧のごとく洗ひ飯すする
俳女三人夏の印南野めぐりかな
午後からは蝉の樹となるさくらの樹
月下美人絵葉書匂ふごとく来て
落蝉の断末魔今抜けにけり

延川さうめん

のどごしは三輪におとらず冷さうめん

PDF= 俳誌の salon

中御門冷泉家

氷にて八女の緑茶を濾しゐたる
落蝉にただ夕風の吹いてをり
原爆忌長崎はけふも雨なのか
夕風にすだれ片寄る晩夏かな
ミジンコは踊りくるひぬ田水湧き
探しもの出てきてけふは原爆忌
今朝からはもう熊蝉の鳴かずなる
夏落葉衣笠山のみどり松
かはたれに目醒めてゐたる長崎忌
すでに空碧しよ蝉の墜ちてゐて
阪神のあれが近づく夜の秋

二度寝してまだ寝不足や残夢月
蜩や水だし煎茶少し濃く
腰抜けし家内救急夜の秋
汗滂沱釈迦に説法眠気くる
落蝉の最期に見しはわれの指

PDF= 俳誌の salon

父の日やピースの紺は昭和色　磯野青之里

ちちのひやぴーすのこんはしょうわいろ

現代人はもう煙草を吸わない。煙草の紙箱のピースのデザインと紺色の箱は昭和の強い名残。箱のデザインは和田誠であったと思う。その和田誠も亡くなって。もう昭和の匂いは消えた。作者の父もピースの愛好家だったのだろう。缶入りもあったが、アルミの封を切るとなんともいえぬ香りが漂ってうっとりとしたし、ピーカンと言って良く晴れた空を缶の紺色に例えてピーカン晴れと言った説も。昔、記念にと缶入りを買って置いていたがいつの間にか吸ったのか、なくなっている。懐かしい昭和も煙と消えた。平和の象徴、「鳩」のデザインも。

真珠かと見紛ふ沙羅の蕾かな　浜田久美子

しんじゅかとみまごうさらのつぼみかな

沙羅は夏つばきの一種、その花は沙羅として、沙羅樹は神話学的には復活・再生・若返りの象徴である「生命の木」に分類されるが、仏教では二本並んだ沙羅の木の下で釈尊入滅したことから般涅槃（はつねはん）の象徴とされ、沙羅双樹とも呼ばれる。サンスクリットではシャーラ、現代ヒンデイー語での名はサール。釈迦がクシナガラで入滅（死去）したとき、臥床の四辺にあったという、四双八本の沙羅樹。時じく（時を選ばず（非時）香る果物』）の花を咲かせ、たちまちに枯れ、白色に変じ、さながら鶴の群れのごとくであったという。（「仏教大辞典」）その沙羅の花の蕾が真珠のように見えたのも肯え通常比喩である表現は、「のよう」「の如く」であるが、見違えた（見まがう）と表現したのも佳い。

PDF= 俳誌の salon

雪嶺抄

雨蛙　◎　笹村　政子

首筋のひいやり八十八夜かな
青梅の洗へばさらに匂ひたつ
子燕の水の匂ひをまだ知らず
親去つて向きを戻せる燕の子
木洩日にすべり落ちたる雨蛙
夏つばめ水切りながら走りけり
夏つばめ日曜市の立つ城下
猫瓶に昭和の駄菓子走り梅雨
梅雨近し花を仮り置く花時計
はらからの集ふ忌日や花蜜柑

木洩日にすべり落ちたる雨蛙

目にも鮮やかな雨蛙の落下。しかも木漏れ日というスポットライトは慣用句「上手の手から水」のように雨蛙を浮き上がらせる。作者いや読者にも印象的で目に焼きついた光景であろう。それをこの句を読んだ読者は雨蛙目がくらみ落ちてゆく場面を文字に移した。これが文芸の力。高濱虚子の「桐一葉日当たりながら落ちにけり」という句があるが、それに匹敵するような作品。雨蛙が木洩日の眩しさに油断してつい滑って落ちたと映像的。

子燕の水の匂ひをまだ知らず

つばめの子は水の匂いをまだ知らぬということは、生きる糧全てを父母から口移しで貰っているから。それはさまざまな動物にもいえることだが、親の持っている菌ももらうことで、母子の強い絆が築かれることになり、子が父母との絆を強く意識するはずである。昔は人間もそうしていた。だから雑菌に馴れていまのような食物アレルギーなどなかったと思う。と、そういうことをつい思わせられる作品。子どもが外で転んで怪我をしても母親の唾液で傷を治した。それでも治ったのがほとんど。今の子どもは傷や雑菌に弱い。アレルギー体質が増えるはず。

蟋蟀抄

梅雨の入り　◎　志方　章子

早々に降り込めらるる梅雨の入り
一八や紫よりも白が好き
店先に眺めゐるだけさくらんぼ
飽きるほど咲き続けけりカーネーション
鮴ひそむ川床の石除けやれば
紫の薔薇貴婦人はかくあらむ
カラー咲く白より白く光りつつ
樟若葉我もみどりに染まりけり
山梔子の香りにしばし足止めむ
短夜や先のことなど考へず

カラー咲く白より白く光りつつ

花言葉は「華麗なる美」「乙女のしとやかさ」「清浄」です。「華麗なる美」「乙女のしとやかさ」の由来は、カラーの名前の語源がギリシャ語の「カロス（美しい・究極の美）」であることからきているという。（花の辞典）「清浄」は「白いカラーの独特の花姿が、純白のウェディングドレスの優雅に広がった裾を連想させることが由来」という。カラーという名を持ちながら色？と思うが、「花は仏炎苞に包まれた棒状の両性花で、香気があり、白い切り花として栽培され、庭の水辺などにも植え花の白さと特異な姿を鑑賞する」（日本大歳時記・青柳志解樹）。カラーの白が白より白い光と色の協調をしている句。眩しい色がいかにも初夏の到来を感じさせた主観写生であろう。短夜の作品。我々にはもう後先のことなど考えている暇はない。今を大事に生きることじゃないのかなどと。

PDF= 俳誌の salon

はまなす抄

木下闇　◎　升田ヤス子

目の慣れて道標ひとつ木下闇
木下闇立羽蝶せつなく蜜求め
立夏かなイペー咲く駅ロータリー
花菖蒲咲いて力を抜きにけり
休みけり薔薇の花びら乾す茶房
在五忌の貧乏葛伸び放題
梅雨愁ひ茸に当たり散らしけり
姫沙羅の見ごろと寺の掲示板
沙羅の花接写に白を深めけり
ひつじ草沼の曇天もたげ咲く

木下闇立羽蝶せつなく蜜求め

花菖蒲咲いて力を抜きにけり

日本国語大辞典によると「せつなく」は「非常に親切である。たいせつに思っている。心にかけて深く思っている。※義経記四に「こころざしはせつなけれども、かくてはかなふまじとて」②悲しさ・寂しさ・恋しさなどで、胸がしめつけられるような気持で、心が苦しい。やりきれない。やるせない。」とあり、そのうち心にかけて深く思っている状態であろうか。下闇で翅を立てて僅かな蜜か水を命の糧として吸っている姿に感動したのだろう。もう一句、花菖蒲が花を開くと力を抜いたというのは咲く前の尖った緊張感が作者に伝わっていたのと咲いた状態のゆったりとしたギャップ。こういう眼力が俳句には必要で、句を広く深くする。俳句は結果を詠んでその前の状態を想像させる。省略の妙。咲いて力を抜いたというところに人間味があって面白い。

別府抄

風薫る　◎　廣畑育子

草屋根にほととぎすの声抜け行けり
ひと雨に植田落ち着きをりにけり
睡蓮の黄色き花の煌々と
風薫る格天井の花の寺
沙羅の花伊予青石に落ちにけり
笠灯籠姫沙羅ぽとりぽとと落つ
ポンプ井戸庫裏に並びし鉄砲百合
爪ほどの蓮の花芽の赤きかな
でで虫よコンクリ壁は美味なるか
夏空仰ぐジャカランダの花仰ぐ

風薫る格天井の花の寺

五月には解放した寺の格天井は寺院建築や書院、数奇屋などに使用されることが多い天井で、格縁という木材を縦横に組んで正方形や八角形の区画を作り、時にはこの区画に絵画や装飾紋様が描かれる。装飾性が高く、和室における格式の中でも最も高いもの。絵画で飾られ、薫る風が本堂を吹き抜ける。作者は寺の本堂で風の香りを心地よく感じている。（「日本建築大辞典」を参考）。

沙羅の花の作品。青石は青色、または緑色の岩石の総称。緑泥片岩、蝉石（せみいし）等の結晶片岩など。特に庭石に用いる秩父青石、紀州青石、伊予青石などをいうらしく「仮名草子」に「庭に青石（アヲイシ）しきたる」とある。四国で青石の産地へ行ったことがあるが、明石城公園「武蔵の庭」にもある。作品はただ、沙羅の花が青石に落ちたとだけ言った。その瞬間の青と沙羅の白との対比が美しく感じたという。俳句には審美眼が大切。

PDF= 俳誌の salon

酒呑（ささの）抄

蓮の花　◎　谷口　一献

紫陽花のテラス櫓を仰ぎをり
老鶯の鳴きしきる杜風清か
陽が照らし月に照らされ蓮の花
キンキンに冷えたあれ呑み熱帯夜
クローゼットひつくり返す夜半の夏
遅咲きの薔薇早々と腐りけり
蛞蝓に塩かける児の無表情
スーパーの冷食棚の涼しさよ
ワクチンは六回目なり朝曇
旅の宿板の浴衣を剥がしけり

陽が照らし月に照らされ蓮の花

陽と陰は自然の倣い、運航の倣い。陰陽の掟をすべて備えて泥田に咲かす佛の花は昼と夜陰陽の光に育まれて咲いた。どんなに苦労があっても、いつかは美しい花を咲かせたいと願う人々の想いを反映した花で、地中で互いに根を絡ませながら群生することから、中国では新郎新婦に贈る「夫婦円満を願う花」の定番としても知られており、作者に相応しい花といえよう。太陽には花月の夜は地下茎を育むまさに陰陽を備えるに相応しいと捉え蓮に思いを重ねている。夢風撰3。

紫陽花の句はテラス（露台）バルコニー、ベランダが夏の季語で重なるからご注意。熱帯夜の句、「あれ」とは阪神タイガースの岡田監督が優勝のことを「あれなあ」と比喩して言ったので関西では「あれ」で通じている。掲句の場合は酒通の隠語でビールのことだと思う。

垂水抄

梅の実　◎　永田万年青

木漏日の連なる実梅照らしけり
愛称で呼び合ふ母娘梅は実に
雨上り日を受く梅の大きかり
遠方の二人来たりし新茶酌む
菖蒲湯の首まで浸かり香を嗅げり
梅雨晴間表六甲活き活きと
運動靴出番の来たる薄暑かな
薫風の汐の香少し街はづれ
下車をして暫しそのまま夏初め
筍の皮の多しを叱らるる

木漏日の連なる実梅照らしけり

虚子のような写生句。平凡であるが虚子に「陳腐な作品は採らないが、平凡はよしとする」と言ったという有名な言葉がある。野球のヒットと同じでヒットの延長上にホームランがある。万年青は地味に俳句を継続して今の地盤を築いた。躰も徐々に回復して元気になってきたのでこれからを大いに期待したい。青梅に木漏れ日が当たってまるで豆電球が連なって祭の電飾のように点った。

その美しさに感動して一句に仕立てた。しかし木漏れ日がその実梅を照らしたとのみ俳句では詠んだ。俳句はここまでであとは読者が受け取って鑑賞し味わう。連携こそ俳句の醍醐味。その味わいを大切にしておくと俳句の永遠性を獲得できる。

彼の写生句のように派手に飾ろうと考えないのがよい。

PDF= 俳誌の salon

箕面抄

梅雨晴間　◎　出口　誠

半袖にして軽快な我が身かな
太陽のはしやぎ過ぎたる梅雨晴間
太陽が自己主張する梅雨晴間
父の日の父の酔ひたる姿かな
紅をほのかにさして手まり花
父の日に洗濯をする父が居る
父の日に息子の買ひし服を着る
父の日に食器を洗ふ父がゐる
父の日の豚とキャベツを炒めけり
父の日の酒の甘さを感じけり

太陽のはしやぎ過ぎたる梅雨晴間

梅雨の晴間は心の闇まで明るく輝かす。その晴間のありがたさから「晴間」だけでも梅雨晴間だという季語にしても良いのだと思う。歳時記にはいまだにない（あるかも）がそのうち出来るかも。もっとも「晴間」で素晴らしい句が出来ればの話。比較的新しい季語「薄暑」は大正三年刊の「新鮮袖珍俳句季寄」には季題のみで例句はなく、同十三年の今井纂修歳時記（今井柏浦編修省堂）には例句として「柿の葉のてらてら光る薄暑かな　青木月斗」がある。梅雨の晴間はたしかにはしやぎすぎるほどうきうきするのであろう。

たじっさ抄

五体投地　◎　田尻　りき

包丁で人を数えて西瓜切る
春落葉真紅に黄にと心引く
うねり来る蚊の音頂点頬を打つ
野薊の咲きほこる頃誰を刺す
蝶とんぽすいれん池が我が天下
青芝や五体投地もよしとする
野あそびのあの日は子もゐて父もゐて
ねぢ花の競ひて咲くや空めざし
あぢさゐのかたむいてくる夜の雨
たうたうと滝を生みだす青葉かな

青芝や五体投地もよしとする

この青い芝生なら五体投地してもいいじゃあないか、というのである。五体投地とは、両手・両膝・額（五体）を地面に投げ伏して祈りながら聖地へと行く。仏教でもっとも丁寧な礼拝の方法でチベットには今も聖地巡礼を、五体投地で礼拝しながら、長い時間をかけて進んでいく人々がいる。「しゃくとり虫のように進む」と説明されるように、やってみれば、いかに進むのが大変かがわかる。チベットの小さな村の村人たちが、聖地ラサへ、そして最終目的地の聖山カイラスへ、２４００キロもの距離を、なんと五体投地しながら巡礼旅をしたという記録もある。但し掲句のように青い芝生ではなく荒れ地や凍った土地もある。大変な巡礼。の他に「包丁で人数を数える」のは危ないが、よくある光景。

PDF= 俳誌の salon

相生抄

水　番　◎　江見　巌

水番の小さく聞こゆる聖書かな
箱眼鏡己を映す底の顔
烏賊釣火水平線に燃え尽きる
キャンプの灯最後に消える山の雨
時の日や厨離れぬ母の声
時の日の約束もなき人もなき
墓ねぶる前うしろより青とかげ
死んでなほ被さつてくる父の日よ
七夕や鳴き砂の中帰り来る
仏壇の風を通して盆用意

水番の小さく唱へる聖書かな

水番とは自分の田に引く水を盗られないように夜見張ること、またその人をいう。農家では、夏の盛りに日照りで田の水が足りなくなることがあり田の水を盗まれないよう二人くらいで夜番をする。その時連れの男が小声で聖書の一説を唱えている。相方の男が熱心なキリスト教の信者なのだろう。敬虔なことだと感心、それに引き換え私は、という気持も含む。ただしこの句はリズムが途中でとぎれるので聞こゆで切らず「小さく」を「ちいさく」と読まず、「ちさく唱へる」とすればぎこちなさが解決する。聖書の一節を唱えることで、きっとこの後喜雨が降るに違いないだろう。昔は「雨ごい」などの儀式をしていたがその句、宝井其角が雨乞いをするものに代わって三囲神社で詠んだとされる句で、「遊ふ田地（夕立）や田を見めぐりの神ならば」と詠んで、翌日に雨が降ったことから有名になった。また後冷泉天皇の御代（９００年前）伊予国守藤原範国は能因法師を使者として祈雨のため、参拝させた。その時の祈祷で三日三夜、雨が降ったとも。「青とかげ」の句も佳い。

つつじが丘抄

知らぬ間に　◎　廷川五十昭

山二つ掛けてたなびく梅雨の雲
青大将のつたり歩道横切れり
知らぬまに人の増え来し蛍狩
水桶にすずなりの茱萸さしてあり
新茶淹れ茶室のいはれ説く女将
右やしろ左三木道蓮の池
畦道の田植了りて野猿かな
残像のしばしあかるき螢かな
越前の汐越なれる松落葉
夏浜に足跡残し貝拾ふ

知らぬまに人の増え来し蛍狩

気が付けばと言わず「知らぬまに」と柔らかい表現で言うのが面白い。蛍の出るのを待って、いよいよ日が落ち蛍がぼちぼち飛び始めた。その様子に夢中になっていてふと気が付けば作者の周りに人が沢山来ている。そういう驚きは蛍見物に経験すること。だが、俳句を詠む人は蛍の様子に夢中で周囲の動きに気が付かないことが多い。それ（周囲）に気づいて句に詠むことも大切。水桶の句、家の表か軒下に水桶があってそこに茱萸の実った枝を指してある。茱萸の美しさと、実を食べるために桶に差してあるのだ。そういう光景を私は会津の大内宿でみたことがある。その時はつつじであったが、なかなか佳い光景、佇まいであった。汐越とは松のことで全昌寺の汐越の松と「奥のほそ道」に出てくる。

PDF= 俳誌の salon

つつが丘抄

青田風　◎　延川　笙子

青田風道渡りゐる蛇を待つ
蛍狩山道に猿現れて
夏の宵里のカラスの呵呵大笑
夕暮るる河鹿鳴く声そここに
小振りなる鍬形虫や山の宿
蚊柱を避けて待ちゐる螢狩
星ひとつ螢待つ間の山の端に
梅雨寒の瀬田の唐橋渡りけり
北国は休みしままの梅雨工事
梅雨明けや水戸の浪士の無念墓

青田風道渡りゐる蛇を待つ

ご主人と同じ風景を詠んだが、今月は笙子さんの方に軍配が上がるか。五十昭さんは道を横切る蛇を傍観写生し笙子さんはその蛇が横切り終わるまで待つ、という所にインドの牛が渡り切るまで待つというのに似ていて面白い。蛇が道路を渡り切るまで待つ優しさと畏れをこの句に感じるからだ。それにまって蛇の長さやのろのろとした蛇の動きも伝わってくる。「蛇を待つ」と詠んだ所に主観写生をも感じる。鍬形虫も驚くほど大きなものでなく「小ぶりな」ところにいかにも山の宿らしい現実性をおびる。山の宿といえば「大きな鍬虫」というのが常套だが、そこを抑えて小ぶりと言ったことに実感があり、飾らない平凡に好感が持てる。

須磨の奥抄

白無垢　◎　草場つくし

退院日青き香りの豆の飯
膝小僧生傷ふえて夏来たる
白無垢の姉と競ひし牡丹かな
五月雨の巽櫓に伝ひ落つ
緑蔭に目で追ふだけの子守かな
緑立ち鳥の鳴声太くなり
反り返る石垣を打つ走梅雨
梅雨じめりシャツの袖口たくしあげ
水馬風に踏ん張りゐたりけり
涼風に揺れて逆さの櫓かな

白無垢の姉と競ひし牡丹かな

昔の思い出であろう。姉上の嫁入り姿を白牡丹と比べた。結果断然として姉上の嫁入り姿のほうが美しく他に比べるものがないほど綺麗で感動。姉上の嫁入り姿は近所への誇りだと思ったにちがいない。その姉上の嫁入り姿の思い出でお元気であればいいが、もしお亡くなりになってもその花嫁姿は強く脳裏に刻み込まれて一生の思い出になる。写真は年月でセピア色になるが、感動の一句は何十年経ても変色しない。

「水馬風に踏ん張りゐたりけり」は水に浮かんでいるあめんぼうは風が吹いたらかんたんに流されてしまいそうだが、見ると流されないよう踏ん張っていると看破した。昆虫学的には知らないが、「踏んばっている」と見たのが詩的。水の表面張力を利用して水面上に立ち、自由に移動するあめんぼはまた、脚以外の全身も水を弾く。主に前脚と後脚の計４本で身体を支え、中脚で水面を蹴り、滑るように移動する（昆虫図鑑）。という。

PDF= 俳誌の salon